

大阪大学図書館報

Vol.21 No.1 Apr. 1987 (昭62) 通巻88号

目 次

○読書のたのしみ

○教官著作寄贈図書

○米国医学系図書館見てある記

○会 議

○米国東部図書館施設を見聞して

○日 程

読書のたのしみ

矢守一彦

○新入生の皆さん、おめでとうございます。諸君にしてみれば、そう云われて一番うれしかったのは合格発表の日であって、そろそろ今日あたりは、「喜んでばかりもいられない。われ何をなすべきか」と改めて考え始めておられるのではないでしょうか。

○よく云われることですが、小学生の頃から受験体制にまき込まれてきた諸君にとっては、「何をなすべきか」は長い間、阪大に合格することであり、与えられたカリキュラムをこなし、よい答案を書くことであったわけです。しかし、今日からは違う。これからは画一的な学習というものはなく、少なくとも文科系に関していえば多くの場合、〈模範解答〉は存在しないのです。まして、いかに生きるべきか、何をすべきかは、皆さん一人一人が自分で決めることです。

○もっとも、何かを求める気持がおきたとき、迷われた時、図書館はなにほどか、皆さんのお役にたつはずです。大学とは一体、何なのか。あるいは諸君のそれぞれの専攻分野において、先輩たちはどこまでのことを見解し、諸君に何をバトンタッチしようとしているのか。図書館は、例えばこのような問題について自問自答し、自学自習する場でもあります。こうして若い諸君を前にしていますと、なつかしい思いがこころの中に連れもどされてくるようで、昔々、図書館の高い書架の谷間に立ちつくしていた自分がよみがえります。蚕が桑の葉をたべつくすように、と申しても皆さんは蚕など見たこともないでしようが——あれもこれも片端から読んでしまいたいと心を充ぶらせたり、逆に落ちこんでいたりしました。

○その頃に比べますと、いまは図書館自体もコンピュータ化が進められるなど、大分変わり

つつあります。しかし今後、情報検索システムがもっと整備されたとしても、提供される情報のうち、どれを糧として選ぶかは、むろんあなた方自身です。本館の、とくに研究図書館としての機能はまだ拡充途上にありますが、世の中の高度情報化のすさまじさは御承知のとおりです。さらに国際化、産業構造の変化などの大きなうねりを考え併せますと、今日はかの大航海時代、産業革命期などと同じくらいの歴史の変革期にあるといえるのかも知れません。だから、社会生活のしくみ、学徒としての気構えなども変わるべきでありますが、一方、変ってはならないものや、変わるのはずがない部分もあるように思います。

○たとえば、気がついたら窓の外がいつしか白んでいたと云うような、のめりこむような読書のたのしみなどは、ニューメディアの数々が開発されてゆくとしても、当分、変わりようがないでしよう。どうか皆さん、図書館の万巻の書のなかで、生涯の精神の拠りどころとなる一冊、これを通じて社会と連帶するのだという〈生き甲斐〉にめぐり会って下さい。また、いつまでも「おめでとう」と云われつづけるわけもなく、挫折感を味う日がくると思います。その際、諸君を鼓舞してくれるのも、案外、先賢の名文句などではなく、平生の愛読書ではないかと思うのです。（入学宣誓式における「図書館オリエンテーション」から）

（やもり かずひこ・附属図書館長・文学部教授）

米国医学系図書館見てある記

加藤四郎

昨年（1986年）4月より微研図書室長に就任したが、やがて中之島図書分館の吹田移転に伴い新たな構想で医学生物学系図書館を新設するためのワーキンググループ（WG）なるものに指名され、可成り頻回の会議がもたれる事になった。この数年は、私の生涯でも最も忙な時期になってしまったが、WGの主催者が微研の伊藤利根太郎中之島図書分館長であるという気安さもあり、時々欠席したのがたたったのか、たまたま私の欠席した時に、米国医学系図書館視察の話がおこって欠席者の私と薬学部分館長岩田宙造教授の2人がWGから、医学部より武田裕講師（現助教授）も指名され教官3人が、図書館員からの3人（石川亮課長、茂幾周治掛長、岩本博掛長）とともに参加することになった。私としては、今年度特に国内外の出張が多く、お引き受けするとしても11月の末の1週間と申し上げて、婉曲にお断りしたつもりであったが、結果的には、その時期に合わすという事になって、視察団長として参加するはめになった。私は、これ迄図書館とは深いかかわりはなかったが、山村雄一阪大総長時代に、医学情報及び視聴覚教育センターとしての医学博物館構想の調査を依頼されたことがあり、最も近いモデルとしてロンドンのウェルカム博物館及び図書館の資料を収集し、昨年の9月を含めて3回同博物館及び図書館を訪れたこともあり、広義の医学情報センターには、関心がなかったわけではないが、時間切れのいくつかの原稿や、米国東部旅行の時差ぼけとの戦いを思うと稍気の重い旅立ちであった。然し、終始図書館の方で、準備が進められたので、出発前の負担は全くなかった。本来なら予め訪問図書館に関する資料をできるかぎり取り寄せて、視察と質問のポイントを絞って行くのが効率の点から望ましいことは云うまでもないが、どうやら今回は、総論的視察旅行というニュアンスであったので、資料的

な準備に時間を費やしたわけでもなかった。

そもそも今回の訪米をお引き受けすることになった時点で先ず訪問先として考えたことは、今回のように短時日では、訪問できる図書館の数もかなり限定されたものになるし、私のような利用者の立場からすると蔵書数や設備の点で最も有名な図書館を見学することも重要であるが、米国で最も研究活動の優れた研究機関がどのような図書館をもっており、どのように利用されているかという立場にたって訪問すべしということであった。即ち世界的にも最も質的量的に優れた研究の行われているN I Hのあるベセスダとハーバード大学医学部のあるボストン（ハーバード大学は今年は創立350周年という記念すべき年にあたっており、ボストン市をあげてのお祝いムードであった）、経由地であるサンフランシスコ郊外のスタンフォード大学を先ず候補に考えて手配を進めたが、スタンフォード大学の方は出発直前になって電報でThanksgiving dayによる休校との通知があり、断念することになった。

そこで、先ず全員でベセスダの国立医学図書館（N L M）及びN I H図書館を訪問し、その後2班にわかつて、第1班（武田、石川、茂幾班員）は、ミシガン大学の中央図書館など、私は、第2班として岩田分館長、岩本図書館員とともにボストンのハーバード大学医学部カウントウェイ（Countway）図書館を訪れるという計画となった。結果的には、N L Mとカウントウェイ図書館は、蔵書数でもそれぞれ全米1・2位という事であったので、少なくともそれをカバーできたことは幸であった。図書館に関して専門外の私が、この視察團に貢献し得るものがあるとすれば、私の内外の友人を通じて団員が効率よく見学できるようにおぜんだけをする位なことであり、ベスセダの方は滞米10数年のNIHでも極めて活発な研究活動をしておられる岡孝巳、山田吉彦両博士を通じて、見学の手筈を整えて戴いた。ボストンの方は、私の研究室で大学院を終えた若宮伸隆博士及び彼のボスであるクーフェ教授を通じてカントウェイ医学図書館に見学の手筈を整えることができた。ベセスダの方は、N I Hの図書館及びN L Mを通して岡博士に同行して戴き、一行6人で効率良く見学することができた。岩田教授、武田講師（現助教授）は何れも滞米経験もあり、それを生かしてそれぞれの立場での情報や印象を得られたことと思うが、参加図書館員は何れも滞米経験がないとの事であったが、英語会話力を含めて活発な行動力と優れた情報収集能力には感嘆するばかりであった。各図書館で、多くのパンフレットなどを戴いたので、それぞれの図書館の設備や機能に関する特色や具体的な比較は、石川課長ら図書館員の方でまとめて戴くことになるが、初めて米国の代表的な図書館を見学するとともに利用者の立場からの図書の利用状態を調査して、岩田分館長とも語り合った印象を述べるとすれば、図書館は、それぞれの研究機関の象徴としてのモニュメント的な存在で、特にN L Mとハーバード大学のカウントウェイ図書館は、建物としての外観、スペース、蔵書量には圧倒される思いであった。おそらく見学者の数も多いのか、私達を迎える図書館側もかなり手慣れた様子で、N L Mでは、日本人見学者のための日本語のビデオを先ず見せられたのは驚きであった。ただこのような偉容を誇る図書館なるものはその大学の博物館（資料館）や美術館をも兼ねており、かつてそこでしか情報を得られなかつた時代の名残りを表徵するものともいえる。N L Mは、図書の閲覧の場というよりは、MEDLINEという世界的な医学情報提供の基地と見做すべき存在でもある。

私の最大の関心事は、実験研究者がどのように図書を利用しているかという事であったが、例えばハーバード大学のダナ・ファーバー癌研究所は、研究者数からみて微研の数倍の規模であるが、偉容を誇るカウントウェイ図書館が徒歩約5分の所に位置するにかかわらず独自の図書館をもっており、更に研究棟がわかかれていると図書館に隣接している建物であってもそれぞれに小規模の図書室、そして、それぞれの研究部門では、10種類程度の雑誌をとて

いるという状態であった。即ちこの研究所の研究者が、カウントウェイ図書館を利用することは殆どあり得ないとのことで、最も手近な図書をもっとも頻繁に利用しているということであった。同様な状態は、N I Hの研究者についてもいえることで、各研究室の数種類の雑誌、研究棟の小規模の図書室、N I H図書館迄が日常的に利用されており、同じN I Hの構内でも稍離れたN L Mとなると、N I Hに10数年もおられる上述の両博士を含めて私の接したN I Hの研究者にとって閲覧のための図書館とは見做されていないようであった。1枚のdiscに数万件のabstractや原著を収録できる時代になり、そのようなdiscが普及すれば、実験系の研究者は各研究室の端末で情報が得られるので、ますます図書館へ足を運ぶことが少なくなることは避け難い。未来の図書館像は、データーバンクとして、データーベースが整然と並ぶ無人の機械室を主体とした情報供給の基地になるのか、データーベースは外部に依存して、たとえ研究者の利用頻度は少くとも旧来通りできるかぎり多種類の図書（データーベースに収録されていない図書、古いバックナンバーなど）を揃えて、そこで図書を手に持って閲覧できる場にするのか、次第にその選択がもとめられるのではないか。

今回の旅行において、おそらく最大の収穫といえば、6名の団員の印象はそれぞれに異なるにせよ、実際に訪問してその実情に触れ、それぞれの図書館員に親しく接することができたことであり、今後必要に応じて、情報入手のルートが確保できた事になったことであろう。今後は、少なくとも数ヶ月の長期滞在者を派遣して、より具体的な情報収集をすることが必要であり、3月末より伊藤図書館専門員の派遣が決定したことは望ましいことである。

今後の展望としては、米国の最先端の図書館といえどもcomputer化の過渡期であり、N L Mでは、図書検索のためのターミナルが並んでいる部屋の隅にこれ迄使用されていたインデックスカードの箱が押しやられていたのは、象徴的光景であった。現在の日本のハイテクの実力からすれば、この程度のコンピューター化は、充分可能なものばかりであり、むしろ日本の進んだ情報工学の技術を新しい図書館の設立に如何に導入するかが問題であり、WGのコンサルタントとして例えれば情報工学の専門家に参加をもとめるなど、この方面の日本の情報の収集や見学も同様に極めて重要なことではないかと思う。幸い大阪大学は、情報工学の分野で優れた実績があり、何よりも現熊谷信昭阪大総長が、わが国における通信工学の権威であることはこの方面を推進させるために絶好の機会もある。

新たな生命科学図書館構想が、先ず阪大内の各図書分室の図書、人員、予算を集中移動させるといったスケールのことを前提とするならば、研究上の障害ともなりかねない。今回のような視察旅行の成果を生かして戴き、わが国のN L Mとして機能するものか、少なくとも、西日本における最も優れた生命科学情報センターとして機能するようなものを是非目指して欲しいものである。

このような本来の目的の外に、視聴覚教育センター、阪大医学博物館、資料館、美術館、大・小会議室、研究者相互の交流のためのロビーなどの付属設備などは、多くの研究者の要



NLMの玄関にて

望に応えるものであろう。

(かとう しろう・微生物病研究所図書室長・同教授)

米国東部図書館施設を見聞して

茂 幾 周 治

本学中之島分館は、医学、生物学系外国雑誌センター館として活動していることは、多くの人の知るところであるが、その分館も近い将来吹田キャンパスに移転し、新館を建てる計画になっている。今回機会があつて加藤四郎微研教授以下6名のメンバーは、86年11月21日から2週間程米国東部の図書館を見学することが出来た。最初の訪問先としてまず世界的に最も優れた医学研究機関の1つであるNational Institute of Health(NIH)(Washington, D.C.に隣接したBethesda市にある)の附属図書館と、同じく NIHの構内にあり世界の医学図書館のメッカといわれているNational Library of Medicine(NLM)、そして、わが国の国会図書館に相当するLibrary of Congress(LC)(Washington, D.C.にある)を見学することになった。

1. NIH図書館

この見学に際しては、NIHで長年にわたり指導的な立場で研究活動を続けておられる岡孝己主任研究員と山田吉彦研究部長のお2人の先生方に自らご案内いただくなど懇切なお世話ををしていただいた。この図書館はNIHの研究員の研究を支援するため3,700種の新着受入雑誌を有しており、全開架式の2階建ての研究図書館であり、一般市民に対しても館内閲覧とセルフサービスを基本に開放していた。NIHの職員に対しては、IDカードが発行され、このカードにより貸出、相互貸借、翻訳、参考業務、複写等のサービスが行われる。

雑誌所蔵リストは外部のシステムを利用して打出している。図書館についての最新情報はtouch terminal(画面を指でタッチするだけ)でアクセスすることにより容易に必要な情報が得られるようになっていた。キーボード端末と合せて10台ぐらいが配置されていた。スタッフは68名で開館時間は、7:45 a.m. ~ 10:00 p.m. (月~木)、7:45 a.m. ~ 6:00 p.m. (金)、8:30 a.m. ~ 6:00 p.m. (日・祝日)である。ここでの印象と言えば、①一般市民にも開放していること ②口頭または書面でuserに対する翻訳のサービスをしていること ③視聴覚資料が充実していること ④開館時間が長いこと ⑤多くの研究所を含む巨大組織にもかかわらず資料が分散されてコントロールされていること等である。

2. NLM

NLMは、医学、生物分野の研究者や図書館員なら大抵の人は知っている医学、生物分野での独立した図書館としては、世界最大である。1986年で創立以来150年を迎え、それを記念して昨年1年間で色々なeventが行われたようである。このNLMには、世界の70ヵ国語における医学、生物関係の図書、雑誌、テクニカルレポート、マイクロフィルム等が400万点以上収集されている。それに加えて電算化された情報バンクであるMEDLINEは、最新の医学

関係の参考文献を500万件以上蓄積している。また約400以上の外国研究機関と出版物の交換を行っている。MEDLINEは世界中の医者、病院、図書館、研究所、大学そして関連会社等のuserから1年に300万件以上の文献調査を処理している。

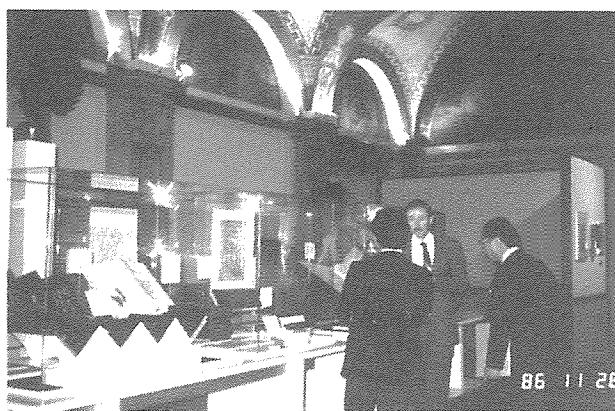
我々一行は、この世界の医学図書館のメッカであるNLMを11月24日の午後に訪問した。NLMには、周知のように隣接したLister Hill National Centerという高層ビルが1980年に完成している。このCenterは、医学、生物学分野のインフォメーション サービスをコンピュータや視聴覚技術を利用してuserに提供している。Mr. Richard K. C. Hsiehは、我々にNLMの概略を会議室のスクリーンを利用して説明してくれた。説明のためのビデオセットは各国語のものがあり、我々には日本語のversionを使用してくれた。その後 Mr. Arthur Broeringも加わり我々の訪問の目的等について1時間程ディスカッションした。館内の案内はまずmain entranceから始まり、古医書も見せてくれた。main entranceに入った所の目録コーナーでは、以前あった目録カードケースが全く姿を消し、それに変わって10数台のuser用のコンピュータ端末が配置されていた。これはCATLINEというon-line cataloging systemを導入した結果であろう。reading roomは、ゆったりとしたスペースがとられ、館内全体が明るく、閲覧机や床のカーペットの色彩なども大変あざやかであった。

ここでの一番の印象は視聴覚室に、ビデオ、カセット、レコード、マイクロフィルム、マイクロフィッシュ等あらゆる資料がuserに利用し易いように整備されていること。そしてどこでもそうであるが複写機は、すべてコイン式でセルフ・サービス(1枚10セント)を行っていることである。スタッフ(full-time)は532名で、蔵書は3,504,000冊、逐次刊行物は23,087タイトル、年間運営費は\$55,910,000(約89億4千万円)、図書予算は\$2,129,000(約3億4千万円)であり、経費面での特色である寄付金は\$12,014,000(約19億2千万円)である。この規模からわかるようにあらゆる点で国立医学図書館としてはまさに世界最大と言えるであろう。

3. LC

LCのことについては、色々な文献で詳しく紹介されているので、ここでは我々が見聞して特に印象的であった点について簡単に述べてみたい。

資料やスタッフの増大により、LCは現在3つの建物が出来ている。まず訪問したのは、一番新しい第3ビルであるジェームズ・マディソン記念館(1980年完成)に勤務するMr. John Henry Hass(Educational Liaison Officer)の事務室である。そして空軍にいたころ日本の厚木基地に来たことのあるというMr. J. Michael Donnellyが3つの建物を案内してくれた。彼は日本語を話せるということであったが、最後までほとんど英語で説明していた。一番古いトマス・ジェファーソンビルは、1800年に新しい首都がWashington D.C.に移動した時に創設された。main entrance hallは、総大理石で創られ、窓はギリシア風のステンドガラスであり、建物全体がルネッサンス時代のFlorenceかVeniceの建築のようであった。guide bookにもこの建築は“American



L.CのEntrance Hallにある貴重図書コーナー

Renaissance” の最初のsampleとして不朽のものであると書いている。Mr. Donnellyは、main entrance hall に展示されている世界で最初に創られた印刷物の1つである Gutenberg の Bible を誇らしげに我々に見せてくれた。円型の main reading room は我々を圧倒させた。古いカードボックス群の奥には、オンライン用の user terminal が10数台配置されていた。2番目のジョン・アダムズビル（1939年完成）では、アジア関係の資料整理を担当するMr. Matsumoto に紹介された。彼は旧満鉄時代の資料等アジア関係の貴重な資料を示して色々と説明してくれた。そして「LCは将来計画として Washington, D.C. 郊外に建物を移転することをすでに計画中である」と言っていた。最後に第3ビルであるジェームズ・マディソン記念館の congressional reading room を案内してくれた。ここではあらゆる形態の議会資料をデータベース化した CRS (Congressional Research Service) のオンラインシステムを user 用 terminal を使って実演してくれた。このシステムは user が必要とするあらゆる議会情報を即座にオンラインで search 出来るすばらしいものであった。我々一行はその後 Harvard University Library 方面行きと Michigan University Library 方面行きの2つのグループに分かれ、合計17の大学、公共、研究機関等の図書館の施設見学を行った。日を改めてこれらの図書館についての見聞記はいずれ何かに紹介されることと思う。なお、参加メンバーは、加藤四郎微研教授、岩田宙造薬学部教授、武田裕医学部助教授、石川亮整理課長、茂幾周治閲覧第一掛長、岩本博目録掛長である。

(もぎ しゅうじ・閲覧第一掛長)

教官著作寄贈図書

一本館一

矢守一彦（文・教授）

城下町の地域構造

（名著出版 昭62）

都出比呂志（文・助教授）

堅穴式石室の地域性の研究

（大阪大学文学部国史研究室 昭62）

真田信治（文・助教授）

標準語の成立事情

（P H P 研究所 昭62）

久貴忠彦（法・教授）

民法の基礎

（法律文化社 昭62）

櫻田榮一（基・教授）

化学プロセス制御

（朝倉書店 昭62）

小谷恒之（教・教授）

Nuclear Beta Decays and Neutrino

（World Scientific, 1986）

大高順雄（言・教授）

Œuvres complètes Marie de France.

（Maison d’Edition Kazama 1987）

一理学部図書室一

小川英行（理・教授）

遺伝子 上・下

（東京化学同人 昭61）

一中之島分館一

浜野 光（医・非常勤講師）

The Physiology of the Cornea and Contact Lens Applications.

（Churchill Livingstone 1987）

一薬学部分館一

藤田広志（工・教授）

西原 力（薬・助教授）

In situ experiments: With high voltage electron microscopes.

（Research Center for Ultra-High Voltage Electron Microscopy, Osaka University 1985）

会議

—附属図書館吹田地区運営委員会—

62. 3. 2(月) 16:00~17:00 (吹田分館会議室)

報告事項 1. 吹田分館新館竣工について 2. 図書館体系検討小委員会について報告があつた。

協議事項 1. 現分館長の任期満了（昭和62年3月31日）にともなう、次期分館長候補者の選考を「規定」に基づいて行った結果、工学部、産研、溶研から推薦のあった、工学部通信工学科教授 中西義郎を選出した。 2. 昭和62年度基本参考図書としてChemical Abstracts 11th Collective Index を要求することになった。

—分館長会議—

62. 3. 9(月) 16:00~17:00 (本館・館長室)

報告事項：1. 主要行事について。事務部長から、各種行事および委員会の活動状況について報告があつた。

協議事項：1. 昭和62年度図書館事業費予算要求書（案）について、基本参考図書購入リストのうち、62年度は、Chemical Abstracts の累積版が刊行されるので、特に、この予算が計上されていることについて補足説明があつた。2. 昭和63年度図書館新規概算要求書（案）について。施設整備費要求のうち、中之島分館が、吹田地区に移転するのを期して、医学生物系を専門分野とするわが国の中的な外国雑誌センター館としての機能を有する生命科学図書館として位置づける理由、機能面、サービス面、および構想について、細部にわたり協議され、ほぼ原案どおり承認された。

—豊中地区運営委員会—

62. 3. 13(金) 14:00~14:50 (本館・会議室)

協議事項：1. 昭和62年度基本参考図書について、資料（昭和62年度、基本参考図書購入リスト）に基づき説明があり、The 11th Collective Index to Chemical Abstracts 他7点3,438千円が原案どおり承認された。2. 次期委員長の選出について。「委員長選出に関する申し合わせ事項」（昭和61年3月10日委員会承認）により、委員会委員名簿のうち、委員長候補者から、投票で、千原秀昭委員（理）が選出された。3. その他。大型コレクションの収書結果等について報告があつた。

—図書館委員会—

62. 3. 13(金) 15:00~17:00 (本館・会議室)

報告事項：1. 主要行事について。2. 図書館体系検討小委員会について、3. 電算機システムについて、4. 吹田分館の増築について、5. 生命科学図書館（仮称）について、それぞれ資料に基づき説明と策告があつた。

協議事項：1. 昭和62年度図書館事業費予算要求書（案）について、2. 昭和63年度図書館新規概算要求書（案）について、それぞれ資料に基づき、説明があり、質疑応答があつたのち、原案どおり承認された。

||||||||| 日 程 |||||

62. 1. 9 図書館委員会 (本館)
 62. 1. 21 日本医学図書館協会理事会・将来計画委員会 (順天堂大学)
 62. 1. 29~30 昭和61年度国立大学附属図書館事務部長会議 (山口大学)
 62. 1. 30 図書館間相互貸借の推進方策調査研究班第4回会合 (京都大学)
 62. 2. 6 大学図書館長との懇談会 (国立国会図書館)
 62. 2. 6 第21回国公私立大学図書館協力委員会 (東京大学)
 62. 2. 10 豊中地区運営委員会 (本館)
 62. 2. 10 第72回附属図書館中之島分館運営委員会 (中之島分館)
 62. 2. 20 図書館体系検討小委員会 (本館)
 62. 2. 26~27 外国雑誌センター館会議・事務打ち合せ会 (東京工業大学)
 62. 2. 27 国公私立大学図書館協力委員会文献複写委員会 (関西大学)
 62. 3. 2 吹田地区運営委員会 (吹田分館)
 62. 3. 4 生物系図書館ワーキング・グループ会合 (第14回) (中之島分館)
 62. 3. 9 分館長会議 (本館)
 62. 3. 13 豊中地区運営委員会 (本館)
 62. 3. 13 図書館委員会 (本館)
 62. 3. 24 生物系図書館ワーキング・グループ会合 (第15回) (中之島分館)
 62. 3. 27 国公私立大学図書館協力委員会文献複写委員会 (関西大学)